

寺崎君は、イタリアの水の都、ベニス（本格的には、ヴェネツィアと書くといいかも知れないが、寺崎君の場合は、そんなことはどうでもよいと思う。寺崎君は、くだらぬ末梢にこだわらず、ぐいと、本質へ深く突っ込む人間であるのでベニスと書くこととする。）で、長い年月を送られた日本人画家である。寺崎君こそ、ほんとうに生きたベニスを、否、生きたイタリアを、身を以て体験されて来た日本人である。ベニスの街頭で近所のおかみさんや、子供など、自由勝手に談笑するベニスの一市民の姿こそ、実に寺崎君であった。その君と親しい縁があったので、今から 40 余年前、私がイタリアに行った時は、ベニスは、もとよりイタリア各地の旅も同君の案内に負う所が多かった。

寺崎君は、洋画家であり、古今のイタリア画家の作品から影響を受けたことは、云うまでもないが、私は、同君の作品を思う時、いつもベニスの画家、ティントレットを思い出さずには居られない。ベニスのルネサンス画を代表するティチアンに対して、一種の叛逆児のような感じのするティントレットの荒々しい野心に富んだ奔放自在の画風を思う時、何となく寺崎君の姿を思い出す。私が同君に案内されてベニスの聖ロッコ寺の会館を訪れた時、全館を埋め尽したティントレットの壁画には、驚異の眼をみはらないでは居られなかった。ルネサンスの大巨匠、ミケランジェロさえも発揮し得なかったような、奔放自由の生命がありのままに発揮し尽されたかの観があり、それは、正にルネサンスの古典美に対する大きな叛逆であったと云ってよかろう。荒々しい筆触、躍動している人物、すべては生命の激動である。

私は、寺崎君の作品を見る時、以上のような聖ロッコ寺の壁画を思い出さない訳にはゆかない。同君は、永いベニスの滞在の後、故国日本に帰られてから、仏教に深い興味をもち、仏教精神の表現としての壁画などを夢みて居られたと思う。単にそれのみでなく、同君がイタリアで修得された壁画のフレスコ技法を日本の壁画に適用することに苦心された。その結実が、法隆寺内の旧経堂に於ける『聖徳太子伝』の壁画である。金堂壁画の同じ壁土を法隆寺内の裏地で発見し、金堂壁画と同様の壁を新たに作り、一堂全部に、且って金堂壁画は、かく画かれたであろうと思われる技法を駆使して画いたのである。灰聞によれば、その画いた技法を細かく著した後に、壺の中に入れ百年後に発見される事を祈り旧経堂の何処かに埋めてしまったとの事である。其処に寺崎君の真骨頂がある。寺崎君は、現在の画に対する評価を全く信じていなかった。百年後に生き残る画を目標に画き続けてきたのである。

寺崎君の画業の中でたいへん惜しいものがある。君が、明治 40 年にイタリアへ行って以来、イタリア全土を行脚して、資料を蒐め、50 年に亘り、構想をかたむけた、大友宗麟遣欧少年使節〈日本に於けるキリシタン文化史的絵画〉14 面の素晴らしい壁画が晩年の大作として完成されたにもかかわらず未だに発表されていないことである。いつの日か、しかも早く、此れ等の大作が、世の人々の目に触れられることを希うものである。

君の画には、思想があり、哲学があり、そして夢がある。それらのすべては、イタリア・ルネサンスの作家と縁のあるものと思う。いずれにせよ、寺崎君は夢の多い画家である。イタリア・ルネサンスを貫く激しい生命の躍動と、深淵のような静かな東洋精神とが結ばれる時、その夢が実現されるのではなかろうか。

此処まで書いてきた時に、寺崎君の訃報に接した。図らずも、これが弔辞になってしまった。哀しみに耐えぬ。寺崎君は、百年後を夢みながら、天国への道を歩んで逝ったのであろう。心から御冥福を祈る。

<寺崎武男 回顧展に寄せて>

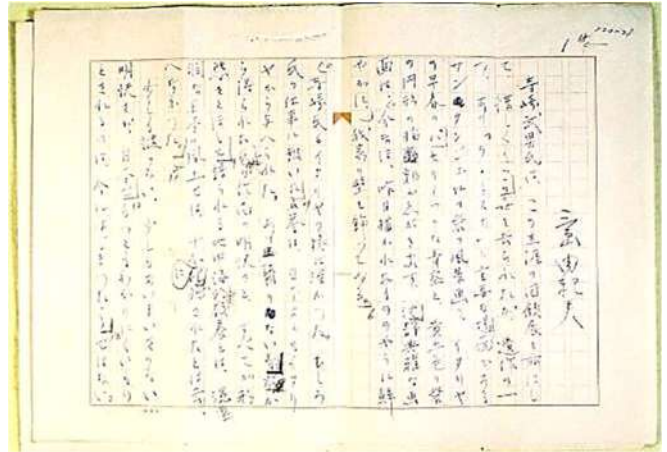
三島由紀夫（作家）

寺崎武男氏は、この生涯の回顧展を前にして、惜しくもこの世を去られたが、遺作の一つ、あの「ラ・トスカ」の主要な場面であるサンタンジェロの砦の風最面の、イタリアの早春のパセティックな青空と、黄土色の砦の円形の輪郭がえがき出す、沈静典雅な画面は、今なお、昨日描かれたもののよう^かに鮮やかに、我家の壁を飾っている。

寺崎氏とイタリアの縁は深かった。むしろ氏の仕事に報いた名誉は、日本よりもイタリアから与えられた。あの翳^{かげ}りない青空から得られた氏の作品の明快さと、すべてが形態をとおして語られる地中海的教養とは、湿潤な日本の風土では、十分に理解されたとは云えなかった。

少しも謎のない、少しもあいまいさがない明快さが、日本でもっともわかりにくいものとされるのは、今にはじまったことではない。氏は、無理解と孤立には少しも煩はされずに、悠々と、晴朗に、芸術家たるの道を闊歩していた。あくまで走らず、跳ばず、悠揚たる散歩の歩度で。

今、氏亡きあとには、ただ、氏が見、描いたただ一つのもの、氏が夢み、信じたただ一つのもの、あのイタリアの無比の青空が、画布の上に燿^{かがや}いている。氏こそ、真の意味で、芸術家の幸福を味わった人ではなかろうか。



<三島由紀夫 自筆メッセージ>
「寺崎武男回顧展」1967年 4月

<東京美術学校時代に房州を訪れ、武男が描いたスケッチ>

1906(M39)11.16 No.53 寺崎武男（房州白浜 七島屋）→ 次兄の熊雄（赤坂）



房州白浜から次兄の熊雄に宛てたハガキの裏面には、野島崎灯台を描いたスケッチがある。イタリア留学中の1915（大正3）年に実家の火災が起き、武男の絵はほとんど消失しているため、渡伊前の美校時代に描いたスケッチとして貴重なものである。

昨日午前六時四十分の一番船で出発して、一時過ぎ館山着、其より車で白濱へ四時半につきました。雨と路の悪いので大にこまりました。其からしろをと家を探したのですが皆だめでしたから前のとまった宿へ行き此にきめました空をながめてハ雨に泣けますいつ晴れるかなんでしやう廿二日頃までいるつもりです末ながら皆様へよろしく兄上にハ御体を御大事にハやく御全快の程祈上げます